



佐藤 未雲

みくも

スペースチャイナ

代表取締役

もうすぐお盆である。あちこちで、エイサーの練習風景を見かけるようになった。中国では旧暦の7月15日を「中元節」、「鬼節」と言い、あの世の最大の祭日であると言いつたらしい。

鬼とは亡くなった人の魂のことである。言い伝えによると、この日は閻魔大王が冥界の門を開け、冥土の鬼の魂がこの世に出てくるという。帰る家を持つ鬼は家に戻るが、家なき鬼はあちこちで道楽の限りを尽くすと言われている。

鬼節のある7月は鬼月とよばれ、不吉な月とされている。引越しや結婚などのお祝い事は控えるのが一般的である。

鬼節の祭り方はいろいろある。アヒルの料理で先祖を供養するところもあれば、読経して災禍を防ぎ、病気の治癒や一家の安泰を願うところもある。

黒龍江に暮らしていた幼いころ、「鬼節」の日はわが家でもお供え物やご

南風

馳走、ウチカビ等の準備に両親は大忙しであった。私たち四姉妹は、あの世で使うお金の準備を手伝った。先祖代々受け継がれてきた鉛製の印鑑にインクを付け、貨幣のしるしを大きな黄色い紙に押ししていく。そして、それを三角に折って、表に帯を付けたら四姉妹の仕事は完了。最後の仕上げは父が帯にあの世の受取人の住所や氏名を書き込む。このお金は天国では一億円の価値があるんだよと冗談を言っていた父の姿が目に浮かぶ。

準備が整うと、家の近くの十字路に供え物やウチカビを持って行き、天国にいるご先祖さまにお供えする。十字路は四方八方に通じているということで、いち早く天国に届けられると信じられていたのである。

沖縄のお盆の風習に通じるものがいくつもある中国の鬼節、冥界に畏敬の念を持ち、あらためて生きていることに感謝をする機会なのかもしれない。

鬼節